第２章　表情識別訓練プログラムの効果について（その１）
── 障害者職業総合センターにおける試行 ──

ここでは、表情識別訓練プログラムを実施した９事例について検討することで、訓練効果並びに訓練実施上の課題について検討する。また、訓練対象者の範囲についても併せて検討する。

第１節　方法　──　訓練対象者と実施方法　──

１．訓練対象者

1996年度から1998年度の各期に障害者職業総合センター職業センターの職業準備訓練に参加した者９名（男性８名・女性１名）。訓練対象者はいずれも訓練に際して、視知覚に特別な困難を認めない（表情を見分けるための基礎的な力に困難の少ない）ことが確認され、かつ、Ｆ＆Ｔ感情識別検査において表情の識別に困難の認められた訓練生であった。

ここでは、視知覚の困難を評価するために、フロスティッグ視知覚発達検査を用いた。

フロスティッグ視知覚発達検査は、読み書きや数の学習などに必要な視知覚能力の発達について知るための検査であり、主に就学前の子どもたちの準備状態を検討するために利用される。検査は、Ⅰ.視覚と運動の協応、Ⅱ.図形と素地、Ⅲ.知覚の恒常性、Ⅳ.空間における位置、Ⅴ.空間関係の５つの機能についてそれぞれ個別に検討できるように５つの部分から構成されている。

表2-2-1に訓練対象者の概要について示す。

表2-2-1　訓練対象者（Ⅰ群）一覧

	年齢	性別	療育手帳	ﾌﾛｽﾃｨｯｸﾞ視知覚発達検査（知覚年齢／○歳：○ヶ月）					Ｆ＆Ｔ感情識別検査正答率（%）			備考	タイプ
				Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	音声	表情	音声＋表情		
				9:04	8:06	9:03	8:00	8:00					
A	１８	男	取得予定	9:04	8:06	8:05	8:00	8:00	８４	６３	６９	学習障害主訴	表･T*
B	１９	男	軽度	9:04	8:06	7:08	8:00	8:00	３８	２８	１９	軽度の自閉傾向	低受信
C	１８	女	軽度	9:04	8:06	8:11	8:00	8:00	６２	６６	６２	軽度の自閉傾向	不特定
D	１９	男	申請中	5:10	8:02	5:03	8:00	7:04	５０	５９	７５	学習障害主訴	相補型
E	１７	男	軽度	8:08	8:02	8:11	8:00	7:04	６６	６２	７５	軽度の自閉傾向	不特定
F	２２	男	申請中	9:04	8:02	4:06	8:00	8:00	７５	６６	７５		不特定
G	１８	男	中度	8:08	8:02	6:01	8:00	7:04	５０	５３	５６		低受信
H	２２	男	中度	9:04	8:06	4:11	8:00	7:04	７２	６３	６６		不特定
I	２３	男	軽度	9:04	8:06	8:11	8:00	8:00	６９	５０	６２	自閉傾向	不特定

□ については、フロスティッグ視知覚発達検査における最高年齢を示す。

■ については、課題遂行に困難を予想させる成績であるが、配慮をすれば訓練は可能と判断した。

＊「表・Ｔ」は表情依存・Ｔタイプを表す

２．訓練の実施状況及び実施期間（回数）

訓練は、訓練対象者１名に対し、訓練者１名・記録者１名の２名によって行われた。訓練場面では、訓練者は必ず訓練対象者の隣に同方向を向いて座ることとした。これは、写真の表情を見る際に反対側からでは感情が判断しにくく、指示が的確でなくなることを避けるためである。

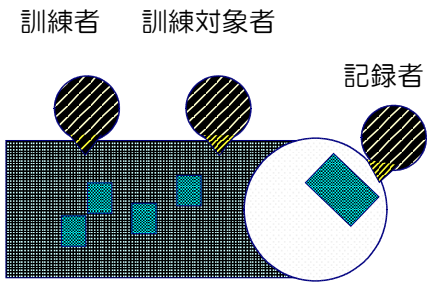

図2-2-1　訓練場面の配置

訓練は週に１回３０分程度を目安として行った。訓練自体の進度とは別に、障害者職業総合センター職業センターの職業準備訓練の期間中に行うという制約のために、基本的に以下のスケジュールで行った。なお、７～８回という訓練回数は、表情識別訓練プログラムで規定している回数ではなく、外的な制約によるものであることに注意する必要がある。表情識別訓練プログラムでは、次の訓練に進むための基準がそれぞれ設けてあり、訓練の進度はその基準に従う。そのため、原則として、回数についての規定はない。

基本的な訓練のスケジュール

◇ 表情写真を用いた他者感情の識別訓練　――　６回～７回（１回３０分程度）

◇ Ｆ＆Ｔ感情識別検査による評価　――　１回（１回５０分程度）

また、訓練全体の「期間」についても若干の増減はあるもの、基本的に１週間に１回の割合で８週間試行（Ａ氏～Ｄ氏，Ｇ氏～Ｉ氏）と１週間に２回の割合で４週間試行（Ｅ氏，Ｆ氏）の２パタンとなった。なお、訓練期間の短縮による影響については、訓練対象者の特徴が同一でなく、また、間隔を短縮して集中的に試行するプログラムを適用した対象者が２名しかいなかったため、その影響を比較検討することは困難である。しかしながら、一般には、訓練間隔を短くすることで、訓練の復習に必要な時間が短縮されることが知られている。このため、この点については今後の課題としたい。

第２節　訓練効果　― 全体的な傾向について ―

９名の訓練対象者について個々に検討する前に、全体の傾向についてまとめておく（表2-2-2，図2-2-2)。訓練は「表情」を対象として行われるため、「音声」については、特徴等についての特別な訓練はしていない。そこで、ここでは、「表情」識別訓練プログラムによる効果の検討、すなわち「表情のみ」「音声＋表情」における効果の検討をする。ただし、訓練に用いる「嬉しい」「悲しい」「怒っている」「いやだなぁ」の台詞を言う際に、「表情」の表出に併せて、訓練者が音声についても「演技」する場合が多いことから、意図的にではないが効果が認められる場合がある。

表2-2-2　表情識別訓練前後におけるＦ＆Ｔ感情識別検査の結果　（%）

		表情識別訓練プログラム　実施前			表情識別訓練プログラム　実施後		
	対象者番号	音声	表情	音声＋表情	音声	表情	音声＋表情
A	１－１	８４	６３	６９	７８	９４	９１
B	１－２	３８	２８	１９	７２	６６	７２
C	１－３	６３	６６	６３	８８	７８	９７
D	１－４	５０	５９	７５	７２	７２	７８
E	１－５	６６	６３	７５	６６	８１	９１
F	１－６	７５	６６	７５	７２	８１	９１
G	２－１	５０	５３	５６	５９	６３	７２
H	２－２	７２	６３	６６	８４	５９	７２
I	２－３	６９	５０	６３	８１	５６	８１

表2-2-2 に、呈示条件毎の訓練前後の正答率を示した。また、図2-2-2には「表情のみ」「音声＋表情」の各呈示条件における正答数を組み合わせて、個人毎の変化をまとめた。表2-2-2及び図2-2-2からわかるように、Ａ氏～Ｆ氏においては「表情のみ」において10%以上の正答率の改善が認められた。これに対し、Ｇ氏～Ｉ氏においては、改善はあまり認められなかった。そこで、以下では、これらの２群に分けて検討する。

図2-2-2の ◯ は健常者（129名）の分布を示したものである（ ◯ が大きいほど人数が多いことを示している)。したがって，【「表情のみ」では27課題：「音声＋表情」では30課題を正答した】組み合わせに最も多く分布していることになる（11名／129名)。

個人毎の訓練効果は訓練前（★）と訓練後（■）を矢印で結んで示した。矢印が右上がりで長いほど訓練効果が大きいことを示している。変化はＡ氏・Ｂ氏・Ｃ氏に顕著であり、Ｄ氏・Ｅ氏・Ｆ氏にも明

らかである。これに対し、G氏・H氏・I氏は上昇傾向は認められるが「表情のみ」の成分の変化は大きくなく、訓練後の到達点が健常者の分布からは離れていることがわかる。

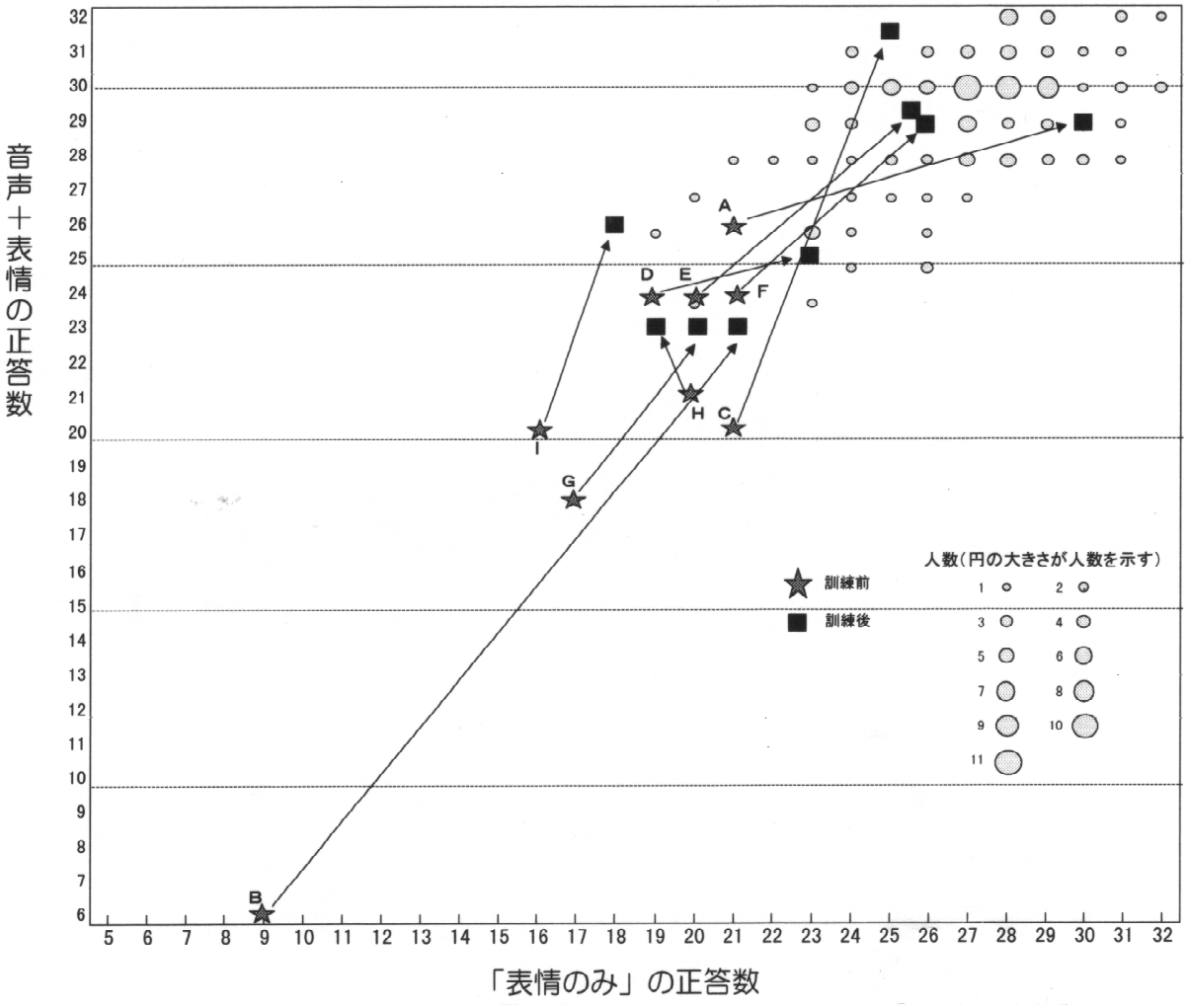

図2-2-2　訓練前後の正答数の変化